０８／０７／１３　　礼拝メッセージ　　近藤修司　牧師

主　　題：ユダヤ人の過ち１
聖書箇所：ローマ人への手紙　２章１７節－３章８節

私たちは１：１８から、罪のさばきについて警告するパウロのメッセージを学んできました。すべての罪人は、人種、民族、性別、年齢などに関係なく、確実に神によってさばかれるということを見て来ました。そのさばきについてパウロは、１：１８から１：３２では特に異邦人に対するさばきについて、そして、２：１から３：８まではユダヤ人に対するさばきについて、より細かく詳細に説明しています。３：９から３：２０まではすべての人々がさばきに服する運命にあると、その警告を発しています。そして、３：２１からは神の義、神の救いについて話を展開して行きます。なぜこのようにパウロが記しているのか、私たちは分かります。神の救いの恵みのすばらしさを私たちがしっかり理解するためには、私たちが神の前にどのような者であるかを知ることが必要だからです。私たちがどれほど罪深い者であるかを正しく認識するなら、そのような私に及んだ神の恵みを正しく感謝します。そこで、パウロは罪人に対して、神の目にあなたはどのように映っているのか、なぜ、あなたはさばきに服する運命なのか、そのことを教えるのです。そして、そこから立ち返って神の救いをいただきなさいとパウロは勧めを為すのです。すでに、２：１からユダヤ人たちがどのような人たちなのかということを見ました。二つの特徴を見ました。（１）彼らは人をさばく者、（２）人をさばいていながら自分も同じことをしている者だと、そのような説明をパウロは加えました。そして、今日から学ぼうとしている２章１７節から３章８節まで、ユダヤ人の三つの過ちを見て行きます。彼らは三つの点で神の前に大きな過ちを犯していたのです。

１．律法に関しての過ち
２．儀式に関して、特に、割礼に関しての過ち
３．彼らの不信仰

パウロがなぜこのようなことを指摘するのか、それは愛するユダヤ人たちの中にイエス・キリストを信じて救われる人が一人でも起こされることを願っているからです。彼は知っていました。ユダヤ人の中に救われていると思っていながら、実は、そうでない人たちがいることを。だから、彼はそのような人々が間違いなくこの救いに与るようにと、そのことを願ってこのような教えを為すのです。ユダヤ人の間違いを学んで行きますが、皆さんはユダヤ人のことだから私には無関係だと思われるかもしれませんが、そうではありません。確かに、ユダヤ人たちの過ちをパウロは教えるのですが、私たちも同じような過ちを犯しているのです。ですから、私たちもしっかりこのパウロの教えを聞くことです。

☆救いに関するユダヤ人の過ち

１．律法に関しての過ち　　２：１７－２４

ひと言で言うなら、彼らの間違いは「律法に救いの根拠を置いていた」ことです。１７節には**「もし、あなたが…」**ということばで始まっています。１７節から２０節を見ると、そのような書き方が繰り返しされています。モーリスという神学者はこれは「断定的言明」だと言います。つまり、パウロは確信のないことを言っているのではないのです。ユダヤ人たちはこのような過ちを犯していると、そのことを知っているゆえに、断定的に確信をもって述べているのです。これがユダヤ人たちだったのです。彼らはあることを誇っていました。その誇っていることをパウロはここに列記しています。パウロは確信をもってこれは事実だ、間違いないと言ってこのような書き方をするのです。

◎ユダヤ人が誇っていること

１）ユダヤ人であることを誇っていた

１７節**「自分をユダヤ人ととなえ、」**とあります。ユダヤ人という呼び方は昔からあったのではありません。この呼び名はイスラエルが北と南の王国に分かれたとき、南の王国ユダに由来するのです。この南王国ユダに属する人々のことを指しているのです。この「ユダ」ということばの語源はヘブル語の「ヤダー」で、「感謝、賛美」という意味をもったことばです。そこで、彼らは「我々はユダヤ人である、神から特別に選ばれた民、神が愛しておられる民、神が喜んでおられる民なのだ」と主張するのです。なぜなら、**「となえ」**ということばは自分で自分のことをそのように呼んでいたことを表わすからです。非常に自慢げに「私たちは特別なのです。私たちはユダヤ人です！」と叫んでいる姿が見えます。彼らはこのように自分たちは神に愛されている特別な民族であると信じていました。確かに、そうです。神はイスラエルを選ばれました。ユダヤ人を選んだのです。しかし、自分たちは特別なのだというその慢心が異邦人を見下してしまうという結果を生み出していたのです。自分たちは異邦人に比べて優れている

とそのような思いをもったのです。なぜなら、私たちに神は律法を与えてくれたからと。そのようなところに自分たちの救いの根拠があったのです。イエスを信じたから救われているのではなく、私はユダヤ人である、神が特別に選んだ民だから救われていると、そのような思いを彼らはもっていたのです。私たちが考えてみたいことは「なぜ、ユダヤ人が選ばれたのか」です。聖書はそのことを教えています。イザヤ４３：２１に**「わたしのために造ったこの民はわたしの栄誉を宣べ伝えよう。」**とあります。また、同じイザヤ４９：６には**「主は仰せられる。「ただ、あなたがわたしのしもべとなって、ヤコブの諸部族を立たせ、イスラエルのとどめられている者たちを帰らせるだけではない。わたしはあなたを諸国の民の光とし、地の果てにまでわたしの救いをもたらす者とする。」**と、なぜ、神がイスラエルを選んだのか分かります。神の証をするためです。彼らが異邦人のところに出て行って、この私たちの神こそがまことの神であるということを人々に伝えるために選ばれたのです。だから、何度も学んでいるように、私たちクリスチャンも同じ目的をもっています。神があなたを救ってくれたのは、この救いを知らないで永遠の滅びに向かっている人々に、ここに救いがあること、ここに罪の赦しがあることを語るためです。それが救われた理由の一つです。ユダヤ人もそうだったのです。この創造主なるまことの神のすばらしさを人々に明らかにするために、神は彼らを選ばれ、特別に用いようとされたのです。同じイザヤ４２：６にも**「わたし、主は、義をもってあなたを召し、あなたの手を握り、あなたを見守り、あなたを民の契約とし、国々の光とする。」**と同じことが言われています。人々の前で神がどんなにすばらしい方かを明らかにする、そのために彼らは選ばれたのです。その目的は聖書の中にはっきり書かれているにもかかわらず、ユダヤ人はそのことをはき違えてしまったのです。私たちは神によって選ばれた特別な民だから、自動的に救われて自動的に神に喜ばれると。いいえ、どの民族であろうと、どこの国籍であろうと、私たちはみな罪人であり、神の前に赦しを得る必要があるのです。たとえ、ユダヤ人であっても。でも、彼らはそのことを分かっていなかった、ユダヤ人であるということに救いの根拠があったのです。

２）信頼できる律法をもっていることを自慢していた

１７節には続いてこのようにあります。**「律法を持つことに安んじ、」**と。この**「安んじ」**ということばは「～に頼る、信頼する」という意味です。ですから、彼らは律法をもっていることに信頼を置いていたのです。律法とはモーセが授かった十戒であり、モーセが書いた五つの本、モーセ５書と呼ばれる創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記を指しています。確かに、それだけを見るなら（神の律法に信頼を置くこと）それは悪いことではありません。なぜなら、神の律法には神が私たち人間に望んでおられる基準が示されているからです。今、私たちは十戒を必要としないのでしょうか？いいえ、必要です。十戒を見るとき、神はどのようなお方であるかを知り、神が私たち人間にどのようなことを望んでおられるのかが分かります。イエスはマタイ５：１７で**「わたしが来たのは律法や預言者を廃棄するためだと思ってはなりません。廃棄するためにではなく、成就するために来たのです。」**と言われています。そして、イエスはその通り律法を成就されました。だから、イエスは完璧な救い主であり、私たちに完璧に救いを与えてくださるお方なのです。ですから、私たちは律法を見るとき、これは旧約の人々のことで私たちには無関係だと思ってしまいますが、私たちにも大切な教えなのです。律法に信頼を置くことに誤りはないのですが、彼らが間違っていたことは、（１）律法をいただいておりその教えを聞いていることに満足を置いたことです。信じるところまで行かないのです。律法が与えられていることに満足を見出そうとしたのです。（２）律法を守ることによって救いが与えられると信じていました。これは大きな問題です。律法が与えられている、そして、それを守っているからと彼らは思っていました。イエスはこのようなユダヤ人たちに対して非常に興味深いことを言われています。ヨハネ５：４５**「わたしが、父の前にあなたがたを訴えようとしていると思ってはなりません。あなたがたを訴える者は、あなたがたが望みをおいているモーセです。」**と。４６－４７節には**「もしあなたがたがモーセを信じているのなら、わたしを信じたはずです。モーセが書いたのはわたしのことだからです。:47 しかし、あなたがたがモーセの書を信じないのであれば、どうしてわたしのことばを信じるでしょう。」**、イエスは「わたしがあなたがたのことを神の前に訴えると思ってはいけない、では、何があなたがたを訴えるのか、あなたがたが望みを置いているモーセが書いたもの、また、モーセ自身だ」と言うのです。イエスは「あなたがたはモーセの教えを尊びそれを守っていると言うけれど、実は、あなたがたは守っていない、その証拠に、モーセが書いて教えたのは実はこのわたしのことだから、わたしを信じないあなたがたはいくらモーセが書いたものを守っているといっても守っていない」と、そのことをここで教えられたのです。そのことに気付かせようとされたのです。なぜなら、ユダヤ人たちは自分たちは律法において完璧だと思っていたからです。守っているから救われているとしていた彼らにイエスは、実はあなたがたは守れていない、だから、わたしがさばかなくてもモーセがさばく、モーセの書いたものがあなたがたをさばくと言われるのです。ただ律法を聞いていることに満足しているだけだと。皆さんもよくご存じのように、律法を一生懸命守りなさい、そうすれば天国に入れますと、守ることが可能だから神がそのように言われたのでしょうか？いいえ、

だれ一人として律法を守ることはできません。律法が与えられた理由は、私たちが神の基準からいかに逸脱した罪人であるかを私たち自身が悟るためです。神はご存じです。知らないのは私たちなのです。ですから、律法を見たときすべての罪人は、私はこの律法を守ることはできません、行ないによって神を喜ばせることはできません、行ないによって神に受け入れられる正しいことはできません、神さま、どうぞあわれんでくださいと救いを求めるのです。そのために律法は与えられたのです。ところが、ユダヤ人たちは「我々は守っている、だから、我々は天国へ行く」と言うのです。そのような過ちを犯していたのです。律法を通して神を信じているというのではなく、自分たちは律法をもっている、そのことに満足していたのです。だから、問題だと言うのです。

３）神との関係をもっていることを誇っていた

１７節の最後に**「神を誇り、」**とあります。神は私たちに律法をくださり私たちを選んでくださった、このように特別な関係を築いてくださった、だから、私たちは救われていると言うのです。大切なことは、神との個人的な関係です。救いはそうです。一人ひとりが神の救いを受け入れるのです。先ほども見たように、私はユダヤ人だということを自慢していた彼ら、私たちにはすばらしい律法が与えられたと満足していた彼ら、ゆえに、私たちは神と特別な関係があると、そのように自負していた彼ら、そのような人たちは時代を超えて存在します。たとえば、私はクリスチャンホームに生まれ育った、子どもの頃から聖書を聞いている、知識もある、だから、自動的に私はクリスチャンであるという人、問題はどのような家庭に育っても、どれほど聖書のことを聞いていても、その人が個人的に神とつながっているかどうかです。イエス・キリストがあなた自身の救い主であるかどうかです。イエス・キリストがあなたの神であるかどうかです。神と個人的な関係が築かれているかどうか、それが大切なのです。ユダヤ人たちはそれを無視していたのです。そして、今の時代でも、そのことを横において、クリスチャンホームに生まれ育ったから、子どものころから聖書を聞いている、教会に行っている、聖書を暗唱している、バプテスマを受けたと、そのようなことに自分の救いの根拠を置いている人たちがいる可能性があります。注意してください。

４）神のみこころを知っていると誇っていた

１８節に**「みこころを知り、」**とあります。この**「知る」**ということばは「分かる、見分ける」という意味があります。ですから、彼らは「我々は神のみこころが分かるし、神のみこころがいったい何であるかを見分けることができる」と主張したのです。非常に、プライドに満ちた発言です。

５）善悪が判断できると誇っていた

同じ１８節に**「なすべきことが何であるかを…わきまえ、」**とあります。この**「なすべきこと」**ということはおもしろいことばが使われています。「異なる」ということばです。ですから、ここでパウロは「あなたがたは『私たちは異なっているものを区別してそれを判断することができる、その違いが分かる』と言っている」と言います。１８節に印が付いているところの欄外にある別訳を見ると「何が重要であるかを律法に教えられて、それらを判別し」とあります。ピリピ人への手紙１：１０にこのことばが使われています。新約聖書の中にこのことばが使われているのは今見ているこの１８節とピリピ１：１０の２箇所だけです。ピリピ１：１０**「あなたがたが、真にすぐれたものを見分けることができるようになりますように。またあなたがたが、キリストの日には純真で非難されるところがなく、」**、この**「すぐれた」**というところにも印があって欄外には「異なっているものを区別する」とあります。ですから、どちらにも訳せるのです。ローマ２：１８では**「なすべきことが」**と訳し、ピリピ１：１０では**「すぐれたもの」**と訳しているのです。パウロは「あなたたちはなすべきことが何であるかをわきまえている、つまり、本当にすぐれたものは何なのか、正しいことと間違っていること、適当であることとそうでないこと、そのような区別ができると主張している」と言います。そして、この**「わきまえ」**ということばですが、ピリピ１：１０では**「見分ける」**と訳されていることばです。これは「試す、検査をする、試験する、吟味する、検討する」という意味です。だから、検査をしてその上で見分けて行くというのです。つまり、ユダヤ人たちが言ったことは「私たちは物事に関して正しい判断力がある、私たちは神のみこころが何であるかを正しく見極めることができる。」ということで、そのように彼らは自負していたのです。

そして、なぜそのようなことができたのか、その理由をパウロは教えています。もう一度１８節を見ると**「なすべきことが何であるかを<u>律法に教えられて</u>わきまえ、」**とあります。これは口頭で教えられていると言うことです。今でも、イスラエルに行くと「嘆きの壁」などでそのような光景を目にします。教師たちが幼い者たちを教えています。また、男性しか入ることができないトンネルの中でもそのようなことが行なわれています。教師たちがことばによって若い者たちを教えているのです。そのことを言うのです。自分たちはずっと律法の教えを受けて来た、だから、私たちはみこころが何であるかを判断ができるし、正しいこととそうでないことの区別ができる、見極めることができるのだと言っているのです。

そして最後、ユダヤ人たちが自分たちのことを誇っていたその６番目は、

６）異邦人に勝っていると誇っていた

１９節に**「また、知識と真理の具体的な形として律法を持っているため、盲人の案内人、やみの中にいる者の光、愚かな者の導き手、幼子の教師だと自任しているのなら、」**とあります。**「自任している」**ということば、これは「確信」ということです。彼らは確信していたのです。何を確信していたのか、何を自任していたのか、それはこのみことばの中に記されている四つのことです。彼らが持っていた確信は「我々は異邦人に比べてはるかに勝っている」ということです。それが証拠に、今から見る四つのことはいかに彼らが異邦人を見下していたかが分かります。**「盲人の案内人、やみの中にいる者の光、愚かな者の導き手、幼子の教師」**と、ここにある**「盲人、やみの中にいる者、愚かな者、幼子」**とは異邦人のことです。彼らは異邦人とはこのような者だと言ったのです。失礼なことです。当たっているところもありますが…。

（１）盲人の案内人

「盲人」とは真理が分からないということを比喩的に使っていることばです。みことばを見ると、旧約聖書には盲人を導く者の責任が重大であることを教えています。申命記２７：１８の初めには**「盲人にまちがった道を教える者はのろわれる。」**とあります。ユダヤ人たちはこのような教えを知っているはずです。それで彼らは言うのです。「私たちは盲人の案内人だ」と。でも、パウロは指摘します。「あなたたちも知っている通り、盲人を手引きする人は非常に大切です、あなたたちにその資格があるのですか？」と。ユダヤ人たち、特に教師たちは自分は異邦人よりもはるかに優れた者であり、霊的な盲人、創造主なる神について何も分かっていない彼らを教え導いてあげなければならないと思っていた、その彼らにパウロは、実はあなたたちにその資格はないと言うのです。そのことは新約聖書の中でイエスが繰り返し教えられたことです。たとえば、マタイ２３：１６を見てください。非常に厳しいことを言っておられます。律法学者やパリサイ人というユダヤ教の教師たちに対して**「忌わしいものだ。目の見えぬ手引きども。…」**と言われました。同じことが２４節にも繰り返されています。**「目の見えぬ手引きども。」**と。つまり、イエスの指摘は「あなたたちは自分たちの目が見える、だから、神について何も知らない、真理のことが分かっていない霊的に盲目である異邦人を導かなければならないと、そのように過信しているが、とんでもない、あなたたち自身が見えていない」ということです。同じマタイ１５章でもイエスのところに律法学者やパリサイ人がやって来て、なぜ、あなたの弟子たちは先祖の言い伝えを犯すのか、パンを食べるときに手を洗っていないと指摘したのです。そのときに、イエスは１５：３**「なぜ、あなたがたも、自分たちの言い伝えのために神の戒めを犯すのですか。」**と言われました。つまり、あなたたちが言っていることは分かる、あなたたちは神の戒めよりも自分たちの教えの方を優先しているではないかと、その例をあげるのです。１５：４**「神は『あなたの父と母を敬え。』また『父や母をののしる者は、死刑に処せられる。』と言われたのです。」**と、これは神のことばです。**「:5 それなのに、あなたがたは、『だれでも、父や母に向かって、私からあなたのために差し上げられる物は、供え物になりましたと言う者は、:6 その物をもって父や母を尊んではならない。』と言っています。」**と、これが彼らの教えだったのです。いかに、彼らは自分たちの都合によって神のことばを曲げているかということです。律法がそのように言っていても、ささげたくなければ、親に対してそのようにしたくなければ、都合よく解釈して自分たちの教えを勝手に作り出して、そのようにしなくてもいいのだと決めていたのです。６節の続き**「こうしてあなたがたは、自分たちの言い伝えのために、神のことばを無にしてしまいました。」**と、神のことばに忠実に従って行くことよりも、自分たちの考え、自分たちの願いを優先していたのです。ここに問題があったのです。１４節では**「彼らのことは放っておきなさい。彼らは盲人を手引きする盲人です。もし、盲人が盲人を手引きするなら、ふたりとも穴に落ち込むのです。」**と、あなたたちが盲人ではないか？と言われるのです。ですから、イエスはここでも自分たちは盲人の案内人だといっているユダヤ人たちに対して、あなたたち自身の目がしっかり見えるようになりなさい、あなたたち自身が先ずしっかり真理を信じる者になりなさいと指摘されるのです。

（２）やみの中にいる者の光

最初にも見たようにイザヤ４２：６に**「わたし、主は、義をもってあなたを召し、あなたの手を握り、あなたを見守り、あなたを民の契約とし、国々の光とする。」**とありますが、確かにその通りです。彼らが言ったように自分たちは**「やみの中にいる者の光」**、罪の中を歩んでいる人たちの中にあって希望の光、救いの光なのです。しかし、イエスが言われること、ここではパウロが言いますが、あなたは本当に罪から救われているか？罪人の中にあって救いのすばらしさをもたらす光になっているか？と問うのです。イエスはヨハネ８：１２で**「わたしは、世の光です。わたしに従う者は、決してやみの中を歩むことがなく、いのちの光を持つのです。」**と言われました。つまり、救われている人たちはこの神のすばらしさを周りの人々に話すことができます。やみの中を、罪の中を歩み続けないのです。でも、あなたがたは今もなおやみの中を歩んでいるのではないか？今もなお、救い主を受け入れることなく、神に逆らい続け、罪の中を生きているあなたがたがどのようにして救いのすばらしさを証することができるのか？と言うのです。

（３）愚かな者の導き手

この**「導き手」**というのは「指導者、矯正する者」という意味です。しかも、**「愚かな者」**というのは「理性がない、無分別」という意味をもったことばです。つまり彼らは、異邦人にはその過ちを矯正してあげなければいけない、正しく導いてあげなければならない、彼らには理性がないし、彼らは分別もつかないからと言うのです。パウロは「では、あなたがたはどうなのか？」と言います。

（４）幼子の教師

「幼子」とは無学な者、未熟な者です。だから、自分たちは彼らを教えてあげなければいけないと言うのです。

彼らユダヤ人は異邦人に対してこのように言って見下していました。自分たちはここに入っていないのです。あくまでも、これは自分たちと関係がない人々のことです。私たちはこのような人たちと全く無関係なのだと彼らは言うのです。彼らのプライドを見て取れます。なぜ、彼らはこのように言えたのか、その理由もパウロは教えています。１９節**「知識と真理の具体的な形として律法を持っているため」**だと。確かにその通りなのです。彼らには神の律法が与えられ、しかも、ここでは**「知識と真理の」**というところにパウロはどちらにも定冠詞を付けているのです。なぜなら、この**「知識と真理の」**とは世の中にたくさんある中の一つというのではなく、本当の知識、本当の真理、「唯一の知識、唯一の真理」ということです。その正しい知識、本物の真理、それが**「具体的な形として」**、すなわち、具現したということです。こうして文字にされているのですから。私たち人間が知らなければいけないこと、その知識は記されていなければ分かりません。私たちが知るべき正しい知識がこのように文字にされている、知らなければいけない真理が文字にされている、そのことを言っているのです。それが具体的に実際に私たちの目に見える形で私たちの前に現われたと。しかも、このことばには「その内容にふさわしい外見」という意味があります。ですから、ユダヤ人たちが言ったことは確かなのです。私たちがもっているこの律法の書、聖書のことばはその内容にふさわしいものです。聖いものです。聖い神が書かれたものだから聖いのです。このみことば、聖書は私たちに真理を教えてくれます。真理の神が書かれたからです。私たちが知るべきことが記されています。なぜなら、私たちが知るべきことは何であるかを知っておられる神が与えてくれるものだからです。ユダヤ人はこの神の知識と神の真理を教えられて来たのです。しかし、問題は彼らがそれらを曲解し、人間の教えへと代えてしまったことです。

先ほども見たように、この人たちの大きな間違いは神のおことばよりも自分たちの思いを優先したところにありました。そこで、パウロはこのように言っています。確かに、あなたがたにこのみことばが神によって与えられたことは、私たちにとって大切な唯一の知識とまことの真理を知るために必要なものだ、だから、それを学んでいる者として責任がある、そのことを知らない人たちに教えて行かなければいけない、そのことを確信していると。そのことを話した上でパウロは言います。「でも、あなたがたにその資格があるのか？」と。ですから、２１節から見て行くと**「どうして、人を教えながら、自分自身を教えないのですか。…」**とこのように話が展開して行くのです。ユダヤ人たちが主張していることを語ったパウロは、今度は彼らに向かって質問するのです。言っていることは確かだけれど、外れてはいないけれど、あなたには本当にその資格があるのか？あなたはその真理を本当に信じているのか？あなたは伝えなければいけないと言っているその神と個人的に正しい関係をもっているのか？あなたは本当にその救いをいただいているのか？もし、それがなければあなたにはその資格がないと。それがパウロがここでこういうことを信じ、こういうことにおいて自慢していたユダヤ人たちにチャレンジしたことです。人々にそのように言っているあなたがたは、その心はどうなのか？間違いなくこの救いをいただいているのか？と言ってチャレンジするのです。

今日、最後に、皆さんに覚えておいていただきたいこと、チャレンジしたいことは、ユダヤ人の過ちを見て来ました。特に、律法に関して。皆さんもいろいろな知識をおもちでしょう？いろいろな考えがあるでしょう。信じていることがあるでしょう？それらは本当に聖書に基づいた正しいものですか？あなたは救われていると言っているかもしれませんが、それは神が言われていることなのかどうかです。ユダヤ人たちは言いました。我々は間違いなく救われている、我々は選民なのだと。神は「のろわれた者よ、わたしから離れて行け！わたしはあなたのことを知らない」と言われます。あなたはそのような人ではありませんか？みことばは私たちの心を探ります。私たちにチャレンジをくれます。みことばは常に私たちに「あなたは大丈夫ですか？」と言ってくれます。感謝なことは、このように神を知っていると言いながら実は知らなかったユダヤ人たち、救われていると言っていながら実は救われていなかったユダヤ人たち、そして、周りの人たちを見下していた彼らに対して、神はあわれみの御手を差し出すことを止めないのです。まだ、彼らを救おうと救いの御手を差し伸べておられる、それは今も変わらないのです。あなたにも同じことをしておられます。どうですか？皆さん、救われておられますか？この救いを確実に自分自身のものとしておられますか？そのことを神は今日あなたにチャレンジしてくださ

っています。しっかりと自らの信仰を吟味することです。そして、もし、あなたの信仰が定かでなければ、このあわれみの御手に自らを委ねることです。「主よ、私を救ってください！」と。そのときにあなたはこの神のすばらしさを知らない人々に、働きを為すことのできる働き人になります。神が用いることのできる働き人になります。そこから始めることです。